

Title	秩序と侵犯 : パスカルにおける計算機体験の意味
Author(s)	永瀬, 春男
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/2527
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	なが 永 瀬 はる 春 男
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 8 1 9 2 号
学位授与年月日	平成 15 年 10 月 29 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	秩序と侵犯ーパスカルにおける計算機体験の意味ー
論文審査委員	(主査) 教授 柏木 隆雄 (副査) 教授 林 正則 教授 和田 章男 東京大学大学院人文社会系研究科教授 塩川 徹也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は 17 世紀フランス思想、科学において巨大な足跡を残したブлез・パスカルが青年時、その精力と知力を傾けて製作した四則計算を主とする計算機と、それに関連する文書類に注目し、従来科学史的、工学的興味およびパスカルの伝記的側面の興味からのみ見られて、その根本的意義に関してはなおざりにされていたそれらが、後の真空実験、さらには『プロヴァンシアル』や『パンセ』へと至る彼の思想的根底の萌芽であることを明らかにした画期的な労作である。全 6 章、序章、結論、および 2 つの補論、年譜など参考文献を含め A 5 判 184 頁で『岡山大学文学部研究叢書』23 号として 2002 年 1 月に公刊、今回の審査にあたってパスカルの「計算機文書類」の申請者による翻訳と現存するパスカル計算機の図版をおさめた A 4 判 70 頁の「翻訳・資料編」が添えられている。

序論でパスカル製作になる計算機およびパスカル自身による計算機に関する文書が、量こそ僅かながら、それがパスカル思想の発展深化の重要な一過程であることを述べたあと、第 I 章「計算機の発明」はパスカル計算機の実際を説明、その発明にいたる過程を、パスカル以前の計算機の歴史についても触れながら、つづさに検討する。そして計算機製作の試行錯誤から大法官セギエによる推挽と保護、スウェーデン女王への献呈、ロベルヴェルによる実演、販売そしていわゆる「決定的回心」以後計算機製作の関心を失うまでを、諸種の資料を勘考しつつ辿る。

第 II 章「計算機関連文書」は、パスカル自身の手になる文書 1『献呈の手紙』、文書 2『手引き』、文書 3『特許状』、文書 4「スウェーデン女王クリスティーナへの手紙」や A 資料、B 資料としてパスカル周辺の文書を個別に紹介・検討し、計算機に関する先行研究も紹介して本論の意義を述べ、第三章「計算機関連文書の資料的検討ー計算機の理念と批判」いわゆる A 資料を克明に読むことによって計算機開発の意義の核心が、「あらゆる算術計算を行い」、しかも旧来の計算法とは全く異り、計算はすべて「規則的な操作」によって遂行される点にあることを明らかにする。このパスカルの言明の真偽を実際の計算機の操作の説明をまじえながら、またパスカル周辺の文書の肯定的評価と否定的評価の両面を仔細に検討し、パスカルの計算機が「容易、単純、迅速、確実」を旨として製作され、構造の複雑さはあっても操作の簡易に重きをおいたことを明らかにする。そして現存するもっとも早いこのパスカルの文書が、パスカルの人物や思考的特徴を有することを述べる。

第四章「計算機関連文書の思想的意味(その 1)ー人物像の証言」は、文書 1、2 が 1646 年初めの「最初の回心」以前のパスカルの心理を伝える資料としての重要性を指摘し、それらが毀誉褒貶に敏感な青年像を浮かび上がらせ、後年『パンセ』で学問の空しさを説く彼の自省への一つの貴重な体験となったとする。しかしこの A 資料の 4 文書は

一般に認められる青年期のパスカルの間像が認められるばかりではなく、一連のテキストとして総合性を示していると説く。

第V章「計算機関連文書の思想的意味（その2）－秩序と侵犯」は、本論の核心部分ともいうべきもので、論者は、文書1『献呈の手紙』および文書2『手引き』の構成が、じつは同一の論理に貫かれており、文書1で仄めかされたことが、具体的に文書2に言及され、ルーアンの偽造品事件と数学者たちの批判とが、それぞれ別の「秩序」にあるものが他の「秩序」を「侵犯」する点で、同質のものであることを明らかにする。この「理論」と「技術」の2秩序の弁別とその中央に身をおいて両者を批判する姿勢は、やがてパスカルの『護教論』の骨格を為す「三つの秩序」の観念構成を早くも示すものとしてきわめて重要であり、第VI章「計算機関連文書の思想的意味（その3）－計算機の修辞学」は、それらの文書の文体が後年のパスカルの明晰で力強く、リズムと音調を最大限に活かした文の特徴をすでに備えていることを指摘、とりわけ文書2の『手引き』の文章を仔細に検討して、たとえば *mouvement* の語の使い方がきわめて精妙であって、『パンセ』などで頻用される「逆説」が、すでにここで見事な効果をあげていることを論証し、「結論」として従来単なる伝記的、科学工学的興味からのみ論じられて、その思想的重要性を看過されたきた計算機関連の文書が、思想家パスカルの根源に繋がり、また後年の『パンセ』まで繋がる極めて重要なテキストであることを述べる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、論者も序論でいうとおり、従来単なる伝記的、科学工学的興味からのみ論じられて、その思想的重要性を看過されてきたパスカルの計算機の発明、およびその資料となるパスカル自身の文書や当時の関係資料を、彼の思想的骨格を示す総合的なテキストとみなす新しい視点から再吟味して、そのテキストのもつ大きな意義を明らかにした点に最も大きな業績がある。論者は現存するパスカルの計算機を実地に見て、そのメカニズムや特徴を分析、従来の翻訳や科学史関係の著作の誤解や過誤を正したことも意義があるが、何よりも実物を前にしない読者に、その構造や操作法、その長短を明快な文章によって理解させたことも高く評価される。また関連資料を丁寧に勘考して、パスカルの計算機製作の胚胎から製作の放棄にいたる過程の年月を跡づけ、従来の定説あるいは曖昧にされていた期日の特定をなしていることも実証を重んじる学界の批判に堪えよう。

しかし何よりも計算機といういわば無機的、利便的かつ工学的と思われる器械を扱って、きわめて思弁的に、かつ文学的に考察がなされて、いわば目に見える計算機の形態から、目に見えぬパスカルの思想のありようを犀利な理論で説き明かし、具体的なイメージとして論述されていることを高く評価したい。とりわけ第V章、第VI章のパスカルのテキストの分析は、論者の文学的感性と知見が十分に発揮されて、パスカルの思想に肉薄する感があり、この論文の白眉といえる。

しかしながら計算機という一種特殊の器械を扱う慎重さから、前半やや叙述が繰り返される印象もあり、今少し論の構成を改善して後半の思想的展開に紙数を費やせば、いっそう論が重厚、緻密になったのではないか。また碩学メナール氏も免れなかった研究対象たる天才パスカルへの思い入れ的なものがこの論文にもみられ、パスカルに与する論がやや安易に映る箇所もなかった。さらに「理論」と「技術」の2秩序の弁別、パスカルがその中央に身を置く、という論の核心におけるパスカルのテキスト理解になお議論の余地はあるだろう。とはいえ本論は国際的に水準の高い日本のパスカル研究に、新しく、かつ重大な視野を導く点で高く評価されるものであり、本審査委員会は本論文を博士（文学）にふさわしいものと認定するものである。